特集・学園めぐり●駒澤学園の巻

駒澤学園躍進の奇跡を産んだ移転事業

学校法人　駒澤学園　学監　伊藤文雄

駒澤学園は、昭和二年道元禅師のご精神を信奉し、教育に活かす目的で世田谷区弦巻に創立された学校である。しかし高邁な理想とは裏腹に戦災で全てを失った学校は、昭和三十年代になっても教育条件は悪く十分ではなかった。戦後の復興は高校生の急増期に校舎を建て、多くは借地だった校地を買うことで進められた。昭和四十年に短大ができ、除々に経営の基盤を固めてきた。しかし、世田谷の校地は狭く、校舎の建て替えは困難で、大学の新設は二十三区内の法的規制もあって、これ以上の発展は望めず、私はどうしても外に校地を求める必要を痛感し、このことを理事会に強く要請してきた。

昭和五十五年、学園の将来計画が練られ、理想の土地を求めて東奔西走した。

稲城の土地は大手A大が出ようとし断念した所であった。広い土地を安く買うには市街化調整区域しかない。規制を解かなければ学校はできない。私は地元で政治力のある稲城市農協を紹介され、担当課長に会い、地域の活性化を進

創立者山上曹源先生胸像

めたいという熱意と人柄に感じるものがあり、学園の精神や将来構想を語り意気投合した。そして昭和五十六年、理事会で稲城市へ全面移転を決定してもらい、上田祖峯学園長のもと果敢に実行に移した。

他にも名乗りをあげたT私大は農協の力で整理した。健康で文化的街づくりを標榜してきた市長を先頭にして市議会の誘致決議を出してもらい、市の土地利用の基本構想を東京都に持ち込み、開発認可へ向けて大型プロジェクトを始動させた。

用地買収を予算内に収めるには、この土地の六〇%をもつS鉄道の協力が絶対必要であった。会社詣でが毎週のように続いた。不動産の担当部長から「うちは慈善事業じゃないんだから。」と言われたこともあった。私は旧知を頼みS鉄道の実力者に会い、交渉の結果破格な値段で買収することに成功した。しかし、個人の地主は

売るといっても、気に入らなければ病院に入院して、会ってもくれなかった。四〇％の土地が買えないまま開発に向けて事業は進んだ。その間の不安と重圧は大変なものであった。結局この土地はS建設の社長の尽力もあって二年後に買収できた。

土地が買えて、短大英語英文科の申請を始めたが、文部省の窓口は時間が足りないのと手続の不備で門前払い同様であった。必死の交渉を

坐禅堂の聖僧（文殊菩薩）

続けて締切日の夜中に受け付けてもらい、私は市への公約をかろうじてはたすことが出来て胸をなでおろした。

しかし、この経験は後に四年制大学の申請に大いに役立った。

事業資金は当初から不安であったが世田谷校地の売却が円滑に進み事業にはずみがついた。

こうして学園は、平成元年、美しい自然の中で本学の心を育む教育を実践出来る環境や、他校の追随を許さない近代的教育施設を兼ね備えたキャンパスを手に入れることができた。

移転事業の余勢をかって、平成五年に駒沢女子大学を設置することが出来た。

駒澤学園は来るべき二十一世紀を展望して、建学の理念に立った新しい教育内容と、大学に課せられた社会的責任をいかに果たしていくべきか真剣に取り組んでいるのである。